

日本史Ⅱ・日本史における戦争と平和

社会科教育講座・川岡勉

1. 授業の概要

この授業の目的は、社会科における基本的な教養として、近代日本の歩みをたどり、その特質を理解するとともに、私たちが生きている現代とはどのような時代であるかを認識するところにある。

到達目標として掲げたのは、(1)日本における近代国民国家の成立過程の特質を把握する、(2)国家や戦争のあり方を規定した近代日本の社会構造や民衆意識を把握する、(3)近代日本および戦後日本社会のあり方について、自分の考えをまとめ論述する力を身につける、の3項目である。

関連するDPは、教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野・教科等についての専門的知識を修得している（知識・理解）である。

受講生は、学校教育教員養成課程の学生が14名、総合人間形成課程12名、大学院生1名の合計27名であった。大学院生以外は、いずれも3回生である。

第1回目の授業では、まず近現代史を学ぶことの重要性について講義を行った上で、①近代（Modern Age）とはどういう時代か？、前近代の社会と近代の社会はどんな違いがあるか？、②日本の近代化の特徴はどこにあるか？、というテーマで自由に作文を書かせた。2回目の授業では、前回の作文を返却した上で、近代とはどういう時代か意見を述べさせ、一口に近代と言っても様々な特徴があり、色々な捉え方があることに気づかせた。3回目の授業では、作文と討論で出された論点を整理し、(1)資本主義・市民社会・ナショナリズム、(2)国民国家の形成、(3)近代化のもつ正と負（光と影）、(4)日本における近代国家の形成、の4項目について共通認識が得られるように論述した。

4回目以降は、岩波新書編集部編『日本の近現代史をどう見るか』をテキストにして、報告担当者（2～3名）による発表の後、全員で討論をする形で毎回1章ずつ読み進めた。最後の時間にまとめを行い、歴史認識の共

有に向けて求められる課題を論述した。各回の報告・討論と試験により成績評価を行った。

2. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

教科内容に関わる研究成果をわかりやすく伝え、教育実習での教材解釈につなげようとしている。

3. アンケート結果

最後の授業時に授業評価アンケートをとり、26名の学生から回答を得た。

まず、この授業の目的は授業の中で明確であったかを問うたところ、11名が「とてもそう思う」、15名が「ややそう思う」と回答した。授業に意欲的・積極的に取り組んだかを尋ねたところ、7名が「とてもそう思う」、18名が「ややそう思う」、1名が「あまり思わない」と回答した。受講したことが有意義であったかという問いには、15名が「とてもそう思う」、11名が「ややそう思う」と回答した。

授業でよかった点、興味深かった点を自由に書かせたところ、「高校までは簡単に触れられるだけであった近現代史を深く考える機会が得られた、1つの出来事にも色々な見方があることに気づかされた、学生が主体的に授業の運営に関わってよかった」などの意見が出された。一方、改善すべき点については、テキストがやや難しすぎるという声があった。

4. 総括

ほかの学生の意見が色々と聞けてよかったとする声がある一方で、教員の説明をもう少し長くって欲しいという声も出された。授業時間が限られている中で、どのようにバランスをとっていくべきか考える必要がある。

高校までの教育では近現代史の分野が軽視されてきたため、学生の基礎知識は決定的に不足し、不正確な情報やデマを信じこんでいる者もいる。今後、歴史認識の共有を図っていく上でも、近現代史に関する知識と判断力を身につけることは避けて通れない課題であり、この分野の教育を強める必要がある。